

豊富な事実にもとづく

## 厳正な検証を

非常に活潑な面白い討論でした。大分勉強にもなりましたし、それより重要なことは色々考えさせられたという建設的な効果がありました。今度の討論会に現われた問題点を整理して、来年はそれを中心に討議を進めたいと思います。その整理の仕方は色々ありますようが、一つの試案として次のようなことを提案したいと思います。まず問題を大別すると、大卒次の三点にならぬのではないかと思ひます。

一 理論の問題

學論の問題——。といふより用語の定義の問題——を一昔さきに片付ける必要があると

今後の討論会では「労働手満足として日本資本主義が必要としたもの」という「目的論的」な建議を前提としたような発言もありましたがが、大体において「ある地域における土地利用及び雇用機会から得られる所得を一人当たりで割つて、各人が一定の生活水準に達し得る場合の頭数を適度人口と見なし、それ以上の人口を過剰人口とする」と言つたような潜在的な建議を頭にぼついているの方が多いつたようになります。しかしそこで問題になるのは、その「一定の生活水準」の一 定をどう決

にあるからです。（尤も不安（Frustration）を感じずに入外から見てどうも恥」と思われる水準にあまんじて入る人の場合、問題」がないとするのは間違っている。よつて外から予期すべき生活水準を決める必要があるという主張もあり立ちますが……）

後者の方の定義を取るとすれば、過剰人口の量の計算に、すでに経済学者が社会学者の援助を得るが、自分で社会学的経済学者になるかしなければならないと思います。地方々々に依つて普通どされてゐる、或は予期されている生活水準が違うか。どういう条件によ

る水準」（あるいは普通とされている水準、達し得なければ不足を感じる水準）と言つたようなとらえ方をするか、それによつて大きく違つて来ます。前者の方が簡単で、全國約に一様に適用出来るという利点はあります。それを現実とどこでつなぎあわせることが出来るかと、いふ問題を残すし、そういう分折から出た結論は果してどういふ意味を持つてゐるか明かではない。もし「社会問題」としての人口問題、Frustration 在もたらすものとしての過剰人口——が問題とされてゐるのならば、後者の方の定義を取つた方が有利だと思います。

が生産費の計算に使う一定の労働評価のよう

二事実の問題

まだ専実についてデータの足りない面も大分出て来たようになります。長男の謙村が戦後ふえたか、次三男の浦村が戦後滅つたか等もつとデータがなければいくら論じても解決を見ない問題を、なるべく細かく説明的に具体的に列記する事。

三 因果関係についての問題

場合、それが「一つの原因であつた」という意味か、「唯一の原因であつた」という意味か、「一番有効な原因であつた」という意味か、必ずしもハッキリしなかつたと思ひます。例えば長男の離村が少かつたのは、或は一家を離れての離村が少かつたのは、「低賃銀と食料生産」との結果とする考え方と、「家にしばられていたため」との見方と、両方とも「一つの要因」という意味で主張されているならば云うまでもなく対立はありません。

しかしまあそらくそこで問題になつて来る。「たゞXよりもYという要因の方が重要（或は有力、根本的、中心的なものである」というような表現です。この「重要」といつた言葉の意味をもう少し検討する必要があると思ひます。

例えば長男が家を出て都会の工員になりまゝを捨てる結論が出るかという風に調査の設計す。その家は土地が少くて生活が苦しかつた。をやる」という事が必要ではないかと思ひまたその家は親の代から村へ入つた家で「家」あります。——どうせ来年は「居ない奴」だからとしての伝統があまり強くなかつた。またその長男は父と折合がよくなかつた。この人のになるでしょうが……。(ロンドン大学講師)場合には、經濟的な要因、「家」の観念がうすかつたという要因、感情的な要因の中どれが重複であつたというような問題の出し方はあまり感心がないと思ひます。意味がないといふのは、こういう一つの事例に於て動機の相對的な強さを測る道具を社会学者が持合はせていないからです。「重要な要因」という事を有義的に言えるのは、多くの例を量的に分析する場合だけだと思ひます。例えば長男の離村の事例が千人あつたとすれば、その中で經濟的な要因が見出されるのが七百人で、

感情的な要因が見出されるのが三百人といふ場合、前者の方が重要な要因というのは當然あります。(尤も必要条件と充分條件と言つたような分析もありますが、これも「実験の誤返し」が許されていない社会科学の場合はどうしても多くの事例の比較に依らなければならぬ。)

どうも初步的な方法論の「お説教」みたいになりましたが、そもそもその結論としては間違點の整理に當つて、まず討議に出て来た因縁關係についての種々な意見や仮説の中で、対立的と思われるものがあつた場合、果して対立しているかどうかを理論的に検討する事、オニの段階としては対立している仮説を並べて見て、どういうような調査によるどういうような事実の蒐集によつて、片方を取り片方

を捨てる結論が出るかという風に調査の設計

す。その家は土地が少くて生活が苦しかつた。をやる」という事が必要ではないかと思ひ

またその家は親の代から村へ入つた家で「家」

あります。——どうせ来年は「居ない奴」だから

としての伝統があまり強くなかつた。またそ

の長男は父と折合がよくなかつた。この人の

になるでしょうが……。(ロンドン大学講師)

場合には、經濟的な要因、「家」の観念がうす

かつたという要因、感情的な要因の中どれ

が重複であつたというような問題の出し方は

あまり感心がないと思ひます。意味がないと

いふのは、こういう一つの事例に於て動機の

相對的な強さを測る道具を社会学者が持合は

せていないからです。「重要な要因」という

事を有義的に言えるのは、多くの例を量的に

分析する場合だけだと思ひます。例えは長男

の離村の事例が千人あつたとすれば、その中

で經濟的な要因が見出されるのが七百人で、